

涌谷駅前
の新たな交流拠点



ゲストハウス
あんたあま



板倉内膳
中村宗十郎

特集

藩と家臣の安泰に尽くした

伊達安芸宗重

八尾藩
伊達安芸宗重

伊達安芸宗重
八尾藩

短刀で切りかかろうとする者に、扇子1本であらがる人物。涌谷伊達家四代の館主・伊達安芸宗重です。原田甲斐宗輔の凶刃にあり、非業の最期を遂げてしまう光景を描いたものです。

この事件は、仙台藩を危機から救った「伊達騒動」(寛文事件)と呼ばれ、「伽羅先代萩」という名で浄瑠璃や歌舞伎の題材にもなり、現代に伝えられています。

伊達安芸宗重が、幼君と仙台藩の将来を憂い、自身の一命を投げうって藩の安泰を成し遂げた出来事として高く評価されています。

令和2年は、その伊達安芸宗重が亡くなった「伊達騒動」から350年を迎える節目の年です。その節目を記念して、現代の涌谷町の礎を築いた伊達安芸宗重を特集します。

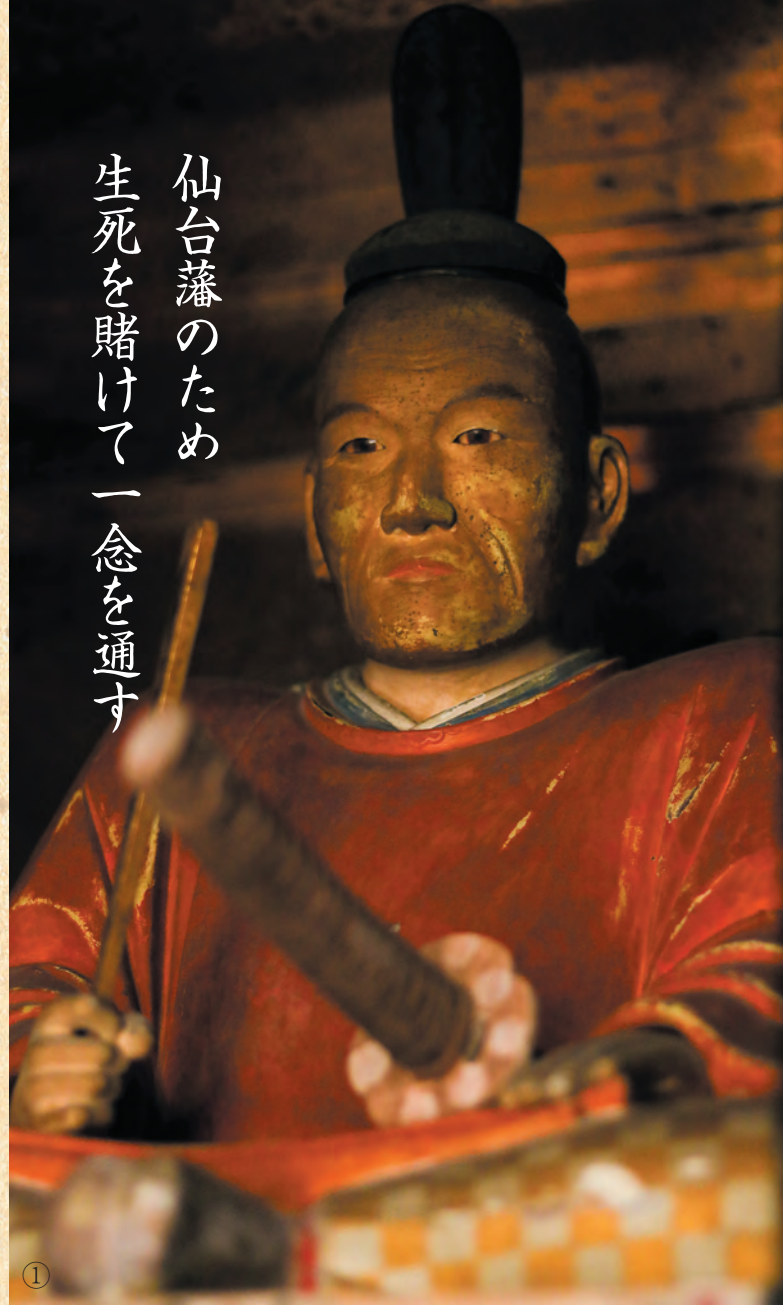


「伊達騒動」を題材とする歌舞伎「伽羅先代萩」の一場面「刃傷の場」
 (左)短刀で切りかかろうと迫る原田甲斐(中)扇子一つで抗おうとする伊達安芸宗重(右)仙台藩安泰を告げるお墨付を懐に入れて駆け付けた幕府の高官、板倉内膳正

仙台藩を救った伊達騒動

万治3年(1660)に、幕府は第三代仙台藩主伊達綱宗に対し突然隠居命令を出したことで、幼君亀千代の後見人伊達兵部宗勝が独裁政治を始めます。次第に多くの家臣の反発を招くこととなり、藩内は大きく動揺。そのような中、宗重は自身に起こった谷地分け問題の裁定を兵部の悪政の材料として立ち上がり、藩政の安泰を幕府に上訴しました。

寛文11年(1671)の3月27日に、江戸の大老酒井雅楽頭邸で裁決が下される直前、兵部側の奉行原田甲斐の凶刃に倒れます。しかし、宗重の思いは幕府に届き、仙台藩の後見役による政治は見直され、仙台藩は安堵となりました。事件後、第四代仙台藩主伊達綱村は、宗重が提出した書類を「治国の基」としてたたえています。



①

仙台藩のため 生死を賭けて一念を通す

伊達安芸宗重公の事績

宗重は、1615年(元和元年)に誕生し11歳のとき、家督が亡くなった多賀城の天童家の養子に入ります。

元服後の天童家への養子入りであったものの、幼い宗重は家督として家臣に支えられながら新田開発を進めるなど、経験を積んでいきました。

伊達安芸宗重公の人物像

長年伊達安芸宗重公について研究してきた涌谷町文化財保護委員長の櫻井伸孝氏によれば、仙台藩を守ることに命を賭した宗重は、気概や企画力、統率力、情報収集・管理能力、気配りに優れていたと考えられます。

年貢の徴収権を認められた土地の境界争い(寛文9年1669年)が伊達騒動の発端と考えられますが、それ以前の書状から伊達兵部の悪政を正そうとする意志が見てとれ、伊達家直系ではない宗重が一門に迫れるタイミングを見計らっていたと推察されます。

1639年(寛永16年)に、宗重の兄・宗実が亡くなったことで、涌谷へ戻り、父・定宗とともに新田開発や涌谷宿を再編成。中でも涌谷宿の再編成では、元々桜丁や田沼丁、立丁周辺にあった商人町を新町・本町に移し、江合川舟運の拠点であった川原町と集約。これは商人町を侍町が取り囲む仙台の城下町をモデルにしていると推察され、今の涌谷町の町並みの基礎となっています。

さらに、仙台藩の縁故者・関係者や江戸幕府から派遣されてきた役人と懇意になり、悪政を訴えるために必要な情報を収集しながら、幕府の審問に向け、260人の家臣



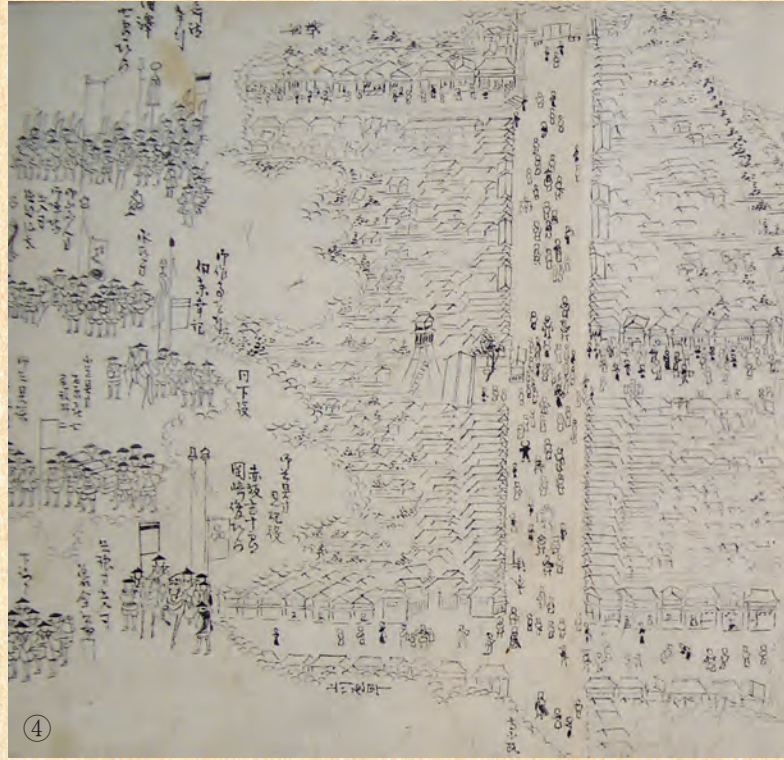
②



忠義を尽くした館主の事績を 今に伝える鐘



③



④

《写真解説》

①見龍廟内に安置されている宗重公坐像②仙台藩四代藩主綱村公が16歳の時、宗重をたたえて書いた「尽忠見龍院」の額。宗重公坐像の上部に掲げられている③東日本大震災の時、墓所門前の壊れた石造五重塔を修復する時に発見された宗重の遺灰が入った香炉④再編された涌谷の本町・河原町周辺の絵図⑤麓峯寺へ宗重と宗重の子・宗元によって寄進された「寛文の鐘」。後世へ保存するため、令和2年にかけて替えが行われた⑥現在の涌谷町を見守るように涌谷神社境内に立つ宗重の胸像



⑥

を率いて江戸に円滑に上京します。そして、幕府に訴える場面でも、有利に事を運ぶため、相手を見極めて行動し、仙台藩を危機から救いました。事件(寛文11年(1671)3月)後、宗重は江戸で火葬され、翌4月、涌谷に遺骨が戻ります。

てられ、その後の歴代館主の墓所とともに、現代に受け継がれています。見龍廟には、第四代仙台藩主伊達綱村が、宗重を顕彰した書「尽忠」の額が掲げられています。最期までぶれることがなかった人柄と手腕は、藩内だけではなく、江戸幕府三代將軍徳川家光の弟で会津松平家初代の保科正之などにも高く評価されています。



卒業

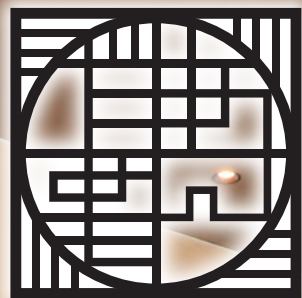
令和となって初めての卒業の季節。
 新型コロナウイルスの影響により、出席者が制限されるなど、異例の形で卒業式・卒園式が執り行われましたが、子どもたちは意気揚々と学び舎を巣立っていきました。



《写真解説》

①美しい花々も卒業を祝しているかのよう②すっかり着慣れた制服に身を包み笑顔で入場③3年間の成果がこめられた卒業証書④気後れせず堂々と卒業証書を受け取る(以上涌谷中学校)⑤感染拡大防止のため卒業証書を受け取る(月将館小学校)⑥卒業証書を受け取る姿に現れる凛々しさ(筈岳白山小学校)⑦壇上から伝える感謝と別れの言葉(涌谷第一小学校)⑧晴れの舞台へレッドカーペットを颯爽と(筈岳白山小学校)⑨修了証書を携え感謝の気持ちを伝えようと一歩一歩前へ(さくらんぼこども園)⑩日頃のありがとうの気持ちが涙とともにあふれ出す(涌谷南幼稚園)⑪小学校への期待がふくらみ歌声も高らかに(涌谷幼稚園)⑫恩師に見送られ笑顔で園舎を巣立ちます(のだけ幼稚園)





ゲストハウス あんだあも

であう・つながる・わくやの宿

一般社団法人涌谷まちづくり推進機構が運営するゲストハウスが、令和2年4月に開業します。
JR涌谷駅前にあったクリーニング店の建物をリノベーションした宿泊もできる涌谷町に生まれた新たな観光拠点です。

andarmo(あんだあも)の由来

宮城県の方言の「あんだも(あなたも)」と「and(英)+armo」、音楽用語の「Andante」を組み合わせた造語。「armo」はイタリアにある人口約100人の基礎自治体(コムーネ comune)。「Andante」は音楽用語で歩くくらいの速度。それらを組み合わせて、「歩くくらいの速さでゆっくりじっくり、小さなコミュニティを、あんだと一緒に作って、涌谷(この地域)を活(い)きましょう」をテーマとしています。

